

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520411

研究課題名(和文)比較植民地文学研究の基盤整備

研究課題名(英文)Comparative study of colonial literatures

研究代表者

西 成彦(Nishi, Masahiko)

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：40172621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：すべての植民地主義的帝国は、それぞれに「帝国文学」のシステムを備えていた。そのなかには、大英帝国やスペイン・ポルトガル・フランス・ロシアのように旧植民地の政治的独立後も「帝国文学」の形式を継承する「語圏文学」を持続させているものもあれば、日本やドイツのように「帝国文学」のシステムそのものの解消を余儀なくされたケースもある。そうした「世界文学」の全体像のなかに、「帝国崩壊」前の日本語文学を位置づけることに重きを置いた研究であった。その成果の一部として『バイリンガルな夢と憂鬱』(人文書院、2014)を刊行したが、これは「帝国」の周縁部に共通して見られた「バイリンガリズム」に注目した著書である。

研究成果の概要(英文)：Every colonial empire had its own hegemonic system of “imperial literature”, though some like the Empires of Britain, Spain, Portugal, France and Russia succeeded in having this system to continue to prosper even after colonised countries obtained their political independence. Other Empires like Germany and Japan had, after the last World War, to reset the “imperial literature” into an exclusively “national” literature confined within their national borders. This research aims at describing from this perspective the history of Nippo-phone literature mainly before 1945. One of its prominent results is a book, Images of Bilinguals in Hyphenated-Japanese Literatures (Jinbun Shoin, 2014), which focuses on the literary representation of bilinguals who had been forced to become bilinguals under the pressure of colonialism.

研究分野：比較文学

キーワード：比較文学 植民地主義 ポストコロニアル ディアスポラ バイリンガリズム

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、日本では旧植民地地域(「外地」)の文学をめぐる研究が急速に進展し、とくに韓国や台湾の研究者、および留学生を交えた知的協働はとみに活発であった。ただ、欧米でのポストコロニアル研究の受容に比して、それらの背景をなすヨーロッパ列強の周辺文学との比較研究は低調であった。語圏別にポストコロニアル研究が進められたことが、その原因であったと思われる。これまでヨーロッパ文学の相互比較を「言語圏横断者」の文学を中心に研究してきた立場から、「比較植民地文学」という新しい方法論の必要性を感じたのが着想の発端にある。

2. 研究の目的

そこで本研究では、英語圏、フランス語圏、スペイン語圏、ポルトガル語圏の「植民地文学」と旧日本語圏のそれとを相互に比較することを試みる。

ポーランド文学の研究から出発して、欧米系の植民地文学や移民文学を研究対象としてきた従来の実績を生かして、日本周辺の20世紀文学を「世界文学」のなかに位置づけることが当面の目標となる。韓国語や中国語は未修得であるため、必要に応じて現地の研究者との連携が不可欠になるが、専門的知識の提供を求める形で、有効な講師招聘を計画する。

3. 研究の方法

(1)日本語圏文学の輪郭を明確にすべく、北海道や沖縄までを「外地」に含めて考察し、国家内マイノリティの文学活動を、欧米語圏植民地の事例と比較対照する。その際に、政治的な独立を達成しつつも、旧植民地宗主国の言語を「公用語のひとつ」としている旧植民地地域をも植民地時代の遺産をひきずる国々として研究対象に含める。

(2)敗戦による「植民地喪失」は、日本語文学の規模縮小を引き起こしたが、その結果として成立した「引揚げ文学」および「在日文学」にも目配りを怠らないようにする。これは日本と同じく「敗戦国」であったドイツや、「植民地喪失」を経験したフランスの事例とも比較が可能なのである。

(3)本国の敗戦後も現地に残留した「移民」の文学にも着目し、そうした「日系文学」と「在日文学」を比較できるような枠組みを構築する。「世界文学」のなかでマイノリティの文学がどのような様態をなしてきたかを、可能なかぎり広い視野のなかで位置づける。サンパウロ大学日本文化研究所との学術的な交流を深めることで、それは可能になるはずである。

(4)その際に、言語を跨いだ日常を文学が扱う際に、どのような処理がなされるかにも

注目する。当面は言語的隣接性に注目し、言語を跨いだ「バイリンガリズム」を焦点化する。これはすでに『エクストラテリトリアル/移動文学論』(作品社、2008)のなかで試みた方法でもある。

4. 研究成果

(1)「外地」概念の拡張に関しては、北海道、沖縄、台湾、朝鮮半島、南北アメリカ日本人移住地などを万遍なく一望に入れるマッピングを行ない、これを英語圏やフランス語圏、スペイン語圏、ポルトガル語圏の事例と比較対照するスタイルに先鞭をつけた。そこで「語圏」という概念を用いることの重要性に気づかされた。沼野充義(東京大学)と和田忠彦(東京外国語大学)らと2014年5月に発足させた「世界文学・語圏横断ネットワーク」(非会員制研究集団)は、こうした発見の成果である。また、日本から南部アフリカ(南アとモザンビーク)への調査旅費、ポーランドからチェコ・ドイツへの調査旅費、ブラジル国内(サンパウロからベレインへ)の調査旅費も本科研費から捻出した。これらの成果は、今後計画している「アメリカ大陸文学史」「アフリカ大陸文学史」の実現に大いに資すると確信している。

(2)「引揚げ文学」や「在日文学」を「世界文学」のなかに位置づけるにあたっては、「一世」と「二世」の言語的バックグラウンドの差異に留意することが重要で、生地における言語的ヘゲモニーと、移住地における言語ヘゲモニーの相互関係が重要になることが分かった。これらの研究の実施にあたっては、韓国からの研究者の招聘に本科研費を充てた。

(3)日系移民の文学に関しては、英語圏のそれと、ポルトガル語圏およびスペイン語圏のそれとを総合的にとらえる枠組みの構築を試みたが、サンパウロ大学での招待講演で、十分な手ごたえを感じることができた。サンパウロ大学およびパラナ連邦大学との共同研究にも今後は参画する予定である。

(4)この三年間で、「バイリンガリズム」を手がかりにした論考を書き継ぎ、『バイリンガルな夢と憂鬱』(人文書院、2014)の刊行に至った。そこでは知里幸恵や中條百合子(後の宮本百合子)、佐藤春夫や呂赫若、中西伊之助や金石範、李恢成やトシオ・モリ、ジョン・オカダの作品群における「バイリンガルズム表象」を多面的に分析した。また、同じ方法をペルーのバルガス・リョサの『密林の語り部』El habladorの分析にあてはめた論文を執筆することで、「小説の一言語使用」と、その背後に透かし見られる「多言語使用」に等分に目を向ける手法を確立できた。これは、上記「アメリカ大陸文学史」の一部をなすものとなる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

西成彦、在日朝鮮人作家の「母語」問題
李恢成を中心に、比較文学研究、査読無、
99巻、2014、7-32

西成彦、移動文学ノ比較文学者にとって
「移動」とは何か、跨境、査読無、創刊号、
2014、12-15

西成彦、「二世文学」の振幅～在日文学と
二世文学をともにみて～、生存学(生活書院)
査読無、7巻、2014、68-85

西成彦、小説の一言語使用問題 中西伊
之助から金石範まで、立命館言語文化研究、
査読無、25-2巻、2014、107-126

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_25-2/RitsIILCS_25.2pp.107-126nishi.pdf#search=%E5%B0%8F%E8%AA%AC%E3%81%AE%E4%B8%80%E8%A8%80%E8%AA%9E%E4%BD%BF%E7%94%A8%E5%95%8F%E9%A1%8C%E2%80%95%E2%80%95%E4%B8%AD%E8%A5%BF%E4%BC%8A%E4%B9%8B%E5%8A%A9%E3%81%8B%E3%82%89%E9%87%91%E7%9F%B3%E7%AF%84%E3%81%BE%E3%81%A7

西成彦、アメリカ大陸は東欧ユダヤ人と先
住民が出会う場所、れにくさ(東京大学文学
部現代芸文論研究室) 査読無、4巻、2013、
132-150

<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/54175/1/reny004015.pdf#search=%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%A4%A7%E9%99%B8%E3%81%AF%E6%9D%B1%E6%AC%A7%E3%83%A6%E3%83%80%E3%83%A4%E4%BA%BA%E3%81%A8%E5%85%88%E4%BD%8F%E6%B0%91%E3%81%8C%E5%87%BA%E5%90%88%E3%81%86%E5%A0%B4%E6%89%80>

西成彦、比較植民地文学研究の基盤整備
(1)はじめに、立命館言語文化研究、査読
無、24-4巻、2013、111-114

西成彦、カンナニの言語政策、立命館大学
産業社会論集、査読無、48-1巻、2012、31-46
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/sansharonshu/481pdf/48-01_04-01.pdf#search=%E3%82%AB%E3%83%B3%E3%83%8A%E3%83%8B%E3%81%AE%E8%A8%80%E8%AA%9E%E6%94%BF%E7%AD%96

[学会発表](計 5件)

西成彦、日本語文学の拡散、収縮、離散、
淡江大学シンポジウム《移動の中の「日本」
空間、言語、記憶》(招待講演) 2015年
6月7日、淡江大学(台湾新北市)

西成彦、「二世文学」の振幅～在日文学と
日系文学をともにみて～、サンパウロ大学日
本文化研究所(招待講演) 2014年2月21日、
サンパウロ大学(ブラジルサンパウロ市)

西成彦、植民地主義をめぐる雑種の思考の
可能性について、韓国日本思想史学会(招待
講演) 2013年11月23日、慶熙大学校(大
韓民国ソウル市)

西成彦、在日文学と小説の一言語使用～
「砧をうつ女」を読む～、日本比較文学会、
2013年6月15日、名古屋大学(愛知県名古
屋市)

西成彦、脱植民地化の文学と言語戦争、日
本台湾学会、2013年5月25日、広島大学(広
島県東広島市)

[図書](計 3件)

西成彦、人文書院、パイリンガルな夢と憂
鬱、2014、277

木村一信、西成彦、垂水千恵、土屋忍、神
谷忠孝、鄭炳浩、柳水晶、池内輝雄、竹松良
明、木田隆文、三上聡太、掛野剛史、橋本正
志、双文社出版、外地 日本語文学への射
程、2014、278

西成彦、人文書院、胸さわぎの鷗外、2013、
225

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西成彦 (NISHI, Masahiko)

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：40172621

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：